貯蔵タンクGX加速

トーヨーカネツ社長 大和田能史氏

水素などあらゆるエネ対応

トーヨーカネツは貯蔵タンクにおけるGX（グリーン・トランスフォーメーション）の研究開発を加速している。4月には社長直轄の事業下に置く組織変更を行った。大和田能史社長に、その狙いや貯蔵タンクビジネスの現状、今後の動きについて聞いた。

―カーボンニュートラル（CN、温室効果ガス排出量実質ゼロ）実現に向けた取り組みを一層強化するため、「GX推進室」と「次世代エネルギー開発室」を社長直轄組織にしました。

「新しい分野であることもそうだが、取引先との情報交換も大事だ。事業体で組めるものは社長自ら情報をやりとりしながら前に進んでいけば、動きも迅速になるのでいいだろうとの判断で社長直轄にした」

―既に、具体的に進んでいるプロジェクトがあれば教えてください。

「現段階では話せないこともあるが、アンモニアや液化二酸化炭素（CO_2）、水素などの技術を研究しており、将来必要になるエネルギー全ての貯蔵タンクを作れるようにするのは当社くらいではないか」

―開発はどこまで進んでいますか。

「水素は研究途中だが、その他のものについては喫緊で供給できるだろう。世の中にはさまざまなタンクメーカーがある状況だ。水素社会はいてはすぐに対応できる。我々の方で貯蔵タンク製造の強みを教えてください。

「大型であらゆるタンクを作れるのが強みだ。タンクは規格が決まっているので、新規設計や非常にやりにくい構造物などがあるが、我々は世界でこれまで約5700基以上2030年にテスト段階に入り、35年には実用化するという国の方針がある。我々の方でも開発を進めて、その方針に沿って取り組んでいく」

―トーヨーカネツの技術が世界に認められている」

「要請があれば、アンモニアやCO_2についてはすぐに対応できるだろう。世のタンクを供給してきており、品質やプロジェクト遂行能力、溶接技術が世界に認められている」

―メンテナンスも重要です。

「メンテナンスは非常に技術を必要とする。当社は設計力を維持しながら、メンテナンス技術も含めた施工力を持続している。人具体制についても、仕事に対応できるように確保している」

技術ほぼ確立、スピード供給

水素社会到来に向けて、トーヨーカネツではアンモニアやCO_2の貯蔵タンクの技術をほぼ確立している。大和田社長は「需要が出てきた時に供給できるようなスピードで研究を進めている」と、準備は万端だ。法改正など政府が50年のCNに向けた施策の後押しも含め、同社のGXに向けた貢献は無限に広がる可能性がある。（村上授）

無断転載・複写禁止 ㈱日刊工業新聞社